

中学校における特別活動（学校行事）としての 合唱活動と、その競技性 ——採点システムを中心に——

柴田 篤志

構成

0. はじめに
1. 特別活動における学校行事、並びに合唱コンクール
2. 合唱活動における教科・学級活動の位置づけ
3. 合唱祭・合唱コンクールのレギュレーション
 - 3-1 曲目リスト作成
 - 3-2 曲目選定
 - 3-3 審査基準
 - 3-4 審査方法
4. 模擬合唱コンクール
 - 4-1 審査結果
 - 4-2 考察
5. まとめ
(参考資料 講評)

0. はじめに

特別活動は「学級活動」「生徒会活動」「学校行事」で構成される。本論文は、中学校における音楽活動の中でも多くの現場で半ば定番となっている合唱活動について、この特別活動（特に学校行事）の視点から再考することを目的とする。

実際の合唱活動は音楽の授業がその主たる学習活動の場になるが、特に中学校の音楽科は中学校1年で年間45回、中学校2、3年生で年間35回とほぼ週一回程度しか機会が補償されない。勢い、学級活動の中で「練習」を行うことで多くの合唱活動は成立している。

而るに「学級活動」は特別活動に属しており、その意味では中学校の合唱活動とは特別活動（学級活動）によって成立しているというのが現状である。

ただし、ここにもう一つの注目すべき側面が存在する。中学校における合唱活動とは、多くが合唱祭・合唱コンクールとして「全校一斉行事」として扱われるという事実だ。即

ち合唱活動は、(1) 音楽科の学習 (2) 学級活動 (3) 学校行事という三つの活動が融合している、教育課程の中でも特異な活動として認識可能なのである。

中学校における合唱活動は、音楽科の視点、もしくは学級活動の視点からは多くの試みや研究報告が成されている。しかし、全校一斉行事としての合唱祭・合唱コンクールとなると多くの場合「音楽科の教員に丸投げ」であるか、過去数年間の慣例を踏襲するかのいずれかで済し崩し的に行われているケースが少なくない。

特に音楽活動(若しくは集団表現活動)としての価値を順位付けすることによって行事参加へのモチベーションとしている場合、その評価方法に関して客観的な視座が固定しているとは言い難い。

本論文では、平成 28 年度の名古屋音楽大学における教職実践演習での「模擬合唱コンクール」を通して、中学校合唱祭・合唱コンクールのへの評価の視座を「学校行事」並びに「学級活動」という特別活動の求める資質・能力を手がかりとして提案することを目指す。

1. 特別活動における学校行事、並びに合唱コンクール

学習指導要領によれば学校行事は儀式的行事、文化的行事、健康安全・体育的行事、旅行・集団宿泊的行事の四つに分類される。ただし本論では「合唱コンクール」のみに焦点を当てるので、ここでは山本信良・今野敏彦による「近代教育の天皇制イデオロギー—開かれた学校とは—」において示される学校行事分類を援用し、「学習関連活動」として学校行事を考える。これに相当する行事は、運動会、球技大会、マラソン大会、水泳記録会といった体育的行事と、学芸会、展覧会、かるた会、そして合唱コンクールと言った文化的行事を包括するカテゴリとなる。学校生活の柱である学習活動の成果を生徒自らが用いて、さらなるモチベーションの獲得に役立てる機会として設定されていると考えてよい。

学習活動を体育的・文化的と区別しないことにより、学校行事を二つの観点で四分類することができる。活動が公開される/非公開であるという「公開・非公開軸」と活動の成果を争う/争わないという「競争・共同軸」である。この二つの軸によって四分類される学校行事には「〇〇大会」「〇〇競技会」「〇〇コンクール」と命名されるものがあり、これらは全て競技性をその特徴とする。ただし、合唱関連の学校行事は「合唱祭」「合唱音楽会」などの名称で行われることもあり、その場合には競技性を排除する方向で企画されていることになるのだが、実を言えば「合唱祭」と銘打たれる学校行事であっても学級間に対抗意識が生じ、最終的に与えられる順位や賞の獲得が目標になったりすることは珍しくない。逆に、コンクールと銘打たれていてもクラス間の競争が全く表面化せず、寧ろ学年の連帯感や学校全体の融和などが目指されるケースもある。こうなると「競争・共同軸」は学校行事分類の絶対的な視座として用いるか、再考の余地があると考えられるのだが、私の

現状での理解では、これはほぼ「学習関連活動」の中でも文化的行事、それも表現系の音楽・美術が関与する行事に限られた問題である。故に、学校行事全体を俯瞰するための視座としてであれば、「競争・共同軸」は有用であるとしていたい。

これとは異なり、公開・非公開に関しては命名との明確なつながりはなく、公開される学校行事には「練習」という名の時間が費やされることが多く、教育課程上大きなエネルギーが費やされることが計画段階から既定のものとなっていることが多い（入学式、卒業式など）。具体的には、準備運営に大きく関わる視座である。また、生徒の自主的な運営であるのか、教師が積極的に指導・介入を行う運営であるかにも大きく関わる。

この準備運営に関しては、行事への《参加》に関する理念と、準備（練習）のための《時間》の捻出に関する理念とにそれぞれ二つの側面がある。《参加》に関しては、「関連教科の教師と係の生徒だけが参加」/「全教師・全生徒が（強制的に）参加」の二側面。《時間》に関しては「関連する教科授業を用いる（教育課程内）」/「授業時間を再編して用いる（教育課程外）」の二側面が存在し、特に合唱コンクールにおいてはどちらを採用するかによってコンクールの位置する“二軸の交差によって示されるマトリクス”上の位置が変化する。

本論で扱う合唱コンクールは、音楽に関する文化的行事であるので、成立のための前提として“練習時間の確保”が絶対条件となるが、その《練習》の運営にも二つの側面がある。「生徒による自主練習」/「教員の管理する指導」の二側面となる。

以上、《参加》（選抜・全員）、《時間》（教育課程内・外）、《練習》（自主・管理）の組み合わせによって八通りの組み合わせが生ずるが、例えば競争・共同軸で考えれば競争性が高まれば自主練習の傾向が強まり、共同性が高まれば管理指導の傾向が強まる傾向になる。公開性が高まれば教育課程外に時間を新たに設け、場合によっては「予行練習」という形でほぼ一日の授業を全て潰したりリハーサルが行われることもある。

ここで特筆すべきは、音楽系学校行事である合唱コンクールの場合、この組み合わせはどんなものでもありうる、という点である。《参加》は選抜で《練習》《時間》は放課後の部活動の時間を用い、教師が指導する、といったやり方も、NHK コンクールなど大会形式の（予選を伴う）演奏が前提となっているならありうるし、《参加》は全員の強制参加、一方《練習》は完全に生徒の自主運営で全校合唱のみを行い、全て公開活動として在学期間の三年間常に歌い続けるというやり方もありうる。これを以て、合唱コンクールと言う学校行事は、単に「競技・共同軸」「公開・非公開軸」の二軸マトリクス上に位置するものではなく、《参加》《時間》《練習》の二側面の組み合わせによって、いかなる意義や目的を付与することも可能であり、非常に可塑性に富んだ活動である、と考えたい。以降、本論では合唱コンクールのこうした特色を前提として論じていく。

2. 合唱活動における教科・学級活動の位置づけ

合唱コンクールであろうと、合唱祭であろうと、合唱という表現活動を少なくとも同学年の生徒達の前で披露するのであるから、練習は絶対に必要である。練習のための時間をどこに確保するかは、実際問題として何よりも重用と言える。《時間》の確保は教育課程内であれば音楽の授業になるのだが、中学校音楽科の授業時数は中1で45、中2、中3で35に過ぎない。問題は総授業回数より「頻度」であり、中1でも週に1.3回程度となるため、あらたに学習した内容が定着し、そこに更にあらたな内容を積み上げるといふ「学習の積み上げ」が困難であることは音楽担当教員なら誰もが悩む出口のない難題である。

これを解決するためにほぼ唯一の解になっているのが「クラスでの練習」である。これは即ち、特別活動における「学級活動」になる。合唱コンクール・合唱祭は、教育課程内では音楽の授業において教師が指導を行い、その学習内容が薄れるのを学級内での自主練習によって補うことで初めて成立する。

更に、《参加》においては全員参加（強制）が基本となる。学級活動が行事成立の基盤となるのであるから当然であるが、これが音楽活動としての合唱の質を保証する際にネックとなる。体育的な集団活動である場合、技量や経験に劣る成員は周囲のフォローによって全体のパフォーマンスを低下させないまま参加することが可能である場合が多いが、音楽家都度の場合、「周囲のフォロー」によって改善されない部分が多いため、特に「競技性」を求める合唱になると“劣るメンバーはクチパク”という対応ですら採用されうる。

成員の力量（音域、声量など）に合わせて曲を編曲して良いのであれば対応は可能だが、中学校における合唱活動ではそれを許さないことが多い。この“全員が強制参加”というルールがどの程度厳格に適用されるかによって合唱コンクールの持つ意味は変わってくる。

学級における対応のうち全ての根幹となるのはこの「全員を参加させる」という意識作りになる。これを「参加しなければよくない（悪い）ことが起こる」というネガティブな方向で行うか、「参加すればよりよい（すばらしい）ものができる」というポジティブな方向で行うかは最初の対応として踏み出す方向を間違えると修正不可の重用なポイントになる。これは砂和議「学級活動」が教師主導で運営されているか、生徒主導で運営されているかにも関わってくる。

学級活動は原則として生徒が自主的に運営することが理想とされるが、実際の学校現場では教師が導く局面がほぼ全てである。ただし、そこに強制力を用いることは避ける傾向にあるため、生徒側は何かを教員によって「決められてしまった」と感じることは多くない。

ここで非常に大きな指導上の要因となるのは、学級担任の教員がどの程度の合唱指導力（音楽能力）を有しているか、である。学校に属する教員の中でそうした能力に優れてい

るのは当然音楽の教員であるため、「音楽の先生が担任するクラス」は他のクラスに比して大きなアドバンテージを得る、とに認知が確定してしまう。特にこの認知は、他クラスの担任教員、並びに音楽教員の担任ではない全てのクラスの生徒が等しく共有するものである可能性が高い。

中学校の合唱活動が「合唱祭」とされ、競技性をなくす対応が選択される背景にはこの問題が大きく影響するのだが、近年、「こうした問題は確かにあるが」とされることが増えている。それは競技性を合唱に導入することが、明らかに学級経営上プラスの効果をもたらすことが広く認知されてきたためである。これは学校規模（総クラス数）が大きい大規模校の減少と関連していると考えられる。一学年が10クラスもあれば三位までに入賞できないクラスが過半となるため、順位を得てモチベーションを膨らませられる「ポジティブな学び」ができるクラスより、成果が認められず自分たちの取り組みをやりきれない思いで振り返る「ネガティブな学び」としてしまいうクラスの方が多くなる。学校に多くの生徒が属していた時代は競技性を取り入れることの副作用が無視できなかったと推測できる。しかし今日、一学年五クラス以上の学校は明らかに減少している。こうなると、表彰対象とならなくとも、それは四位、五位であり三位との差はそれほどネガティブには受け取れない可能性が大きくなる。

その代わりに強く意識されるのは、“自分たちの活動がどのように評価され、判定されたのか”という手続きの普遍性、公正性になる。本研究において、採点システムをメインに考察しているのはこの部分への一助となることを目指すためである。

3. 合唱祭・合唱コンクールのレギュレーション

合唱コンクールは通常クラス対抗となる。これが合唱祭と銘打たれ、出来上がった音楽表現活動を（絶対的指標のみならず、相対的指標に照らしても）評価しない、というものになったとしても、複数曲目が披露されることが普通であろう。全校合唱として行われるのであれば一曲のみのケースが多く、これに学年合唱や有志合唱など、合唱を構成する人員が変化する。

本項目では、実際に「教育実践演習」の授業で行った“模擬合唱コンクール”での試みを元に論述するため、これ以降は「クラス対抗で行われる合唱コンクール」を念頭に置くこととする。

前提として、1、クラス対抗である、2、一学年4クラス～8クラス、3、課題曲・自由曲の二曲を歌う、という叩き台を定め、ここから《如何にして合唱コンクールを企画・運営するか》を模擬的に実行する。

3-1 曲目リスト作成

この試みにおいては課題曲・自由曲を定めねばならない。叩き台の段階では「第〇学年を対象とする」という縛りは設けず、ともかく「中学生の自由曲、課題曲として相応しい楽曲」をリスト化する作業を行った。

最終的に模擬的にはあるが合唱コンクールの形態で相互評価を行うため、作業グループを定めた。8人のグループが5つ、7人のグループが5つで計10グループ、それぞれグループ毎に曲目リストを作成させた。細かな指定は以下の通り。

- ・一グループにつき、六曲以上のリスト（グループリスト）を授業内で作成します。
 - ・リストには次の五つの要素を持つ曲を必ず含めて下さい。
 - ・一つの曲で複数の要素を持たせてもよろしい。
 1. かんたんな曲
 2. 難しい曲
 3. 短調の曲
 4. アップテンポの曲
 5. 伴奏のカッコイイ（派手な）曲
 - ・選んだ曲にどの要素を入れたかを「紅蓮の弓矢（2、3、4）」のようにタグ付けして下さい。
 - ・この他に、わかるものは以下のタグもつけて下さい（含めなければいけない訳ではありません）。
 - （卒）卒業、別れ系
 - （社）社会問題系…戦争、平和、環境など
 - （F）ファンタジー系…意味不明なものなど
 - （A）動物系
 - （友）友達、家族系
 - （自）自然系
 - （神）神話、民話系
 - （無）無伴奏のもの
 - （S）ソロが入るもの
 - （P）ポピュラー系
 - （W）三拍子系
- （この他、タグの提案があれば申し出てください）

このグループリストの狙いは、10グループが曲選びをするに十分な候補曲のリスト（正味30曲程度）を作成するためである。

曲目選びは合唱コンクールにおける「最重要項目」であるにもかかわらず、特に《曲の選択範囲》が明示される場合はその範囲が著しく狭い。精精、クラス数プラス二三曲で、クラス数の二倍以上の曲数が候補になることは珍しい（理由については「曲目選定」の項で扱う）。逆に自由に選んで良いとする場合はのちに対応に困る曲（声部数、音域、楽器編成、伴奏の有無など）が候補としてあがる可能性がある。結果として、「今までこの学年はこういう曲を歌ってきた」という過去の履歴から選ばれることが殆どになるのだが、この場合、“過去”の積み重ねが厚くなることによって、伝統はあるが時勢にそぐわない曲が何年間も連続して歌い継がれるという、あたかも伝統芸能の保存活動のような結果をもたらしてしまう。

歌い継がれてきた歌の継承も重要であると同時に、“私達だけの歌”を見つけることも教育的意義としては重要であり、曲目リストの新規更新は必要不可欠であると考えたい。このリスト作りは「どのような曲をリストに含めるのが妥当であるのか」を体験的に学習することを狙っている。と同時に、リストに含まれる曲の上限・下限についても考察する材料とするため、まずは大量の曲目を推薦させることで100曲前後の“全体リスト”を作ることにも目論見の一つになっている。実際には音楽科の教員が個人の知識や経験に基づいてこうしたリストを作らざるを得ないわけであり、「知らない曲は当然候補にはならない」。これに関しては、曲に触れる（聞く、演奏する、評価する）経験こそが何よりも欠かせない。

さて、この作業によって提案された曲目は、曲数にして100曲程度になる、と想定したのだが、実際には88曲になった。一グループ最低6曲の提出義務があったわけで、十グループなら最低60曲、1.5倍くらいまでは膨らむ、と読んだのでほぼ予想通りではあったが、正直もう少し多くの曲があがると考えていた。重複曲がかなり多く、正味曲数にするとかなり減ってしまったことが見込みとは異なっていた。

次の作業は「全体リストから曲目リストへの曲目絞り込み」になる。学生への細かい指示は以下の通り。

- ・全体リストの中から「他のグループに歌ってもらいたい曲（自分が歌いたい曲ではない）」を三曲選びます。これは個人投票とします。人気の高いものから31位までの曲を「自由曲リスト」とします。
- ・31までの曲の中でもっとも順位が高く（1）のタグ（かんたん）が付いた曲を課題曲とします。
- ・自由曲リストに上がった曲を推薦したグループは、その曲の音源・楽譜を提供で

きることが望ましいです（持っていない場合は申し出て下さい）。

本来なら曲目選定が次の作業になるが、全体リストから「この中から歌いたい曲を選んで下さい」という選曲リストへのダウンサイズを先に行う。これは、全体リストの曲に全て目を通し、知らない曲であるならその曲の魅力を理解するべく努力した上で、“それでもこの曲をリストに入れたい”という曲を選定させるための作業であり、本来なら合議ではなく教員個人の美的感性に基づいて行われるものになる。演習授業であるが故の学習ステージになるが、次項目の「曲目選定」に大きな影響を及ぼすためこの部分も詳説したい。

最も工夫したのは、“本人が歌いたい曲”ではなく、《他者に歌ってもらいたい曲》にしたこと。挙げる曲数は五曲にすることも検討したが、「一票しか入らない曲」が多くなることを避けたい意味で少なめの三曲としている。今回の研究における模擬合唱コンクールには課題曲・自由曲が必要であるため、一曲の課題曲を含めて三十曲の曲目リスト、と考え、31位までを自由曲リストとした。

課題曲に関しては指導者が一方的に申し渡してもよかったが、最も人気の高い「易しい曲」とすることで、どんな曲が課題曲になり得るのかを学ばせる意図があった。

なお最も重要であったのは、曲目選定の際に“楽曲としての魅力”に基づいた判定をするため、この自由曲リストには全て音源並びに楽譜が必要である、という部分であるのは言うまでも無い。通常、これが用意できないがために、曲目リストは選択範囲を狭めることになるのだから。豊富な音楽経験を有し、恵まれた参考教材を利用出来る音楽大学の教職履修者であるから求めうる課題である。一般化することには大きなハードルがあることはまさしく判った上で敢えて課している。

なお、完成した曲目リストは以下の通り。

課題曲：	心の瞳	(14票)
自由曲：	信じる	(16票)
	春に	(15票)
	COSMOS	(13票)
	野生の馬	(9票)
	YELL	(9票)
	空駆ける天馬	(8票)
	聞こえる	(8票)
	証	(6票)
	ひとつの朝	(6票)
	川	(6票)

HEIWA の鐘	(4 票)
走る川	(4 票)
モルダウ	(4 票)
マイバラード	(4 票)
この地球のどこかで	(4 票)
花を探す少女	(4 票)
名付けられた葉	(3 票)
君とみた海	(3 票)
大地讃頌	(3 票)
海の不思議	(3 票)
Let' s Search for tomorrow	(3 票)
群青	(3 票)
虹	(3 票)
友～旅立ちのとき～	(3 票)
親知らず子知らず	(2 票)
旅立ちの日に	(2 票)
消えた八月	(2 票)
変わらないもの	(2 票)
時を越えて	(2 票)
あなたへ 旅立ちに寄せるメッセージ	(2 票)

3-2 曲目選定

30 曲の自由曲リストから、10 のグループ毎に一曲を選定した。

実際の合唱コンクールであれば、この曲目リストの曲数はもっと少ないものになるであろうし、そうなれば全ての曲を聴かせ、楽譜を提示するという方法論も採用可能である。ただし本研究においては、なるべく多くの曲目をリストとして公開することが一つの目途であったため、各グループに「全体リスト」→「自由曲リスト」の絞り込みの段階で“自分たちだったらどの曲を歌いたいのか”の目星をつけさせてある。

こうした「予習」を前提に、曲目決めのために一時間ほどの時間を取り、グループ全員が候補とする曲を十分に理解した上で選曲を行うように申し渡した。30 曲の全てを知っている学生は恐らくいないと予想し、教員側は全曲の楽譜並びに音源を用意し、“この曲を聴かせてください”という要望があったものは楽譜をプロジェクターでスクリーンに投影しつつ曲を流す、という手続きを取った。30 曲中、聞き取りの要望があった曲は「空駆

ける天馬、川、HEIWA の鐘、花を探す少女、名付けられた葉、君と見た海、海の不思議、群青、友～旅立ちのとき～、親知らず子知らず、消えた八月、時を越えて、あなたへ」の12曲であった。

この項目においては、実際の教育現場との取り組みの間に大きなギャップがあることに修正を加えていない。模擬的に合唱コンクールを行うとは言え、実際の学生は「音楽大学の四年生」であり、音楽経験や音楽能力、知識において中学生のそれとは比べるべくもない。そうしたアドバンテージを敢えて援用することで、単時間で自由曲を確定させるというやり方を採用したが、これは発表する機会（模擬合唱コンクール）までの練習期間が限られており、スケジュール進行を早める必要があったため、本来の教育現場においては最低でも一週間、時間が許すなら数ヶ月（ある年次の合唱コンクール終了時から翌年度の合唱コンクールまでのスパンで考えて）を用いることが望ましいと考える。今回はこの「時間をかけた選曲」に関する実験的な試みは行えなかったが、確認すべき問題であることは間違いないことを付言しておく。

なお、決定した自由曲は以下の通り。

- | | |
|--------------------|-------------------------------|
| ①春に | →自然・ファンタジー/易 2 難 |
| ②HEIWA の鐘 | →社会/易 1 速 4 伴 1 |
| ③聞こえる | →社会・自然/難 3 伴 1 |
| ④時を越えて | →卒業・自然/易 1 |
| ⑤友 旅立ちの時 | →ポピュラー/短 1 |
| ⑥花を探す少女 | →社会/難 2 伴 2 |
| ⑦あなたへ 旅立ちに寄せるメッセージ | →卒業/易 1 |
| ⑧ひとつの朝 | →卒業・神話/難 1 伴 1 |
| ⑨野生の馬 | →自然・動物・ファンタジー/難 2 短 1 速 3 伴 1 |
| ⑩虹 | →卒業・ソロ・ポピュラー/伴 1 |

3-3 審査基準

三つの前提（1，クラス対抗である、2，一学年4クラス～8クラス、3，課題曲・自由曲の二曲を歌う）が存在するため、単に10グループの演奏に順位をつけるだけではクラス合唱の結果としてのコンクールをシミュレートしたことにならない。

本来であれば、10グループを「このグループは一年生担当」「このグループは三年生担当」という具合に役割を固定させるべきだが、一つのグループが7～8人と少ないことから判るように、飽くまで“曲を選んで練習して発表して審査する”という流れを模擬的に

体験することが優先されており、音楽的な完成度は必ずしも求めていない。そこで案出したのは「個人投票」「担任投票」「審査員投票」という三つの立場から評価し、それぞれ「別の観点から演奏の価値をはかる」ことである。

個人投票の基準は、単なる順位付け。上手な方から一位から九位まで（自分のグループ以外）を順位づける。確固とした審査の基準は示さない。

担任投票の基準は、個人投票と同じく順位付けに基づくが、担任（に指名された学生）の審美眼による「個人的な評価基準」に基づく。審査の基準に関しては個人投票・担任投票は全く同じであるが、審査の方法との組み合わせにより「はかれる演奏の価値」の意味が変わってくるように企図している。

審査員投票の基準は声量、発音、速度・強弱、ハーモニー、歌詞解釈の五項目。それぞれの項目を1～6の六段階で評価し、全ての項目が満点なら30点となる。

基準を項目に分けたのは審査員投票のみで、個人投票・担任投票に項目を設けなかったのは、この二つの視座を担当する評価者には音楽的に十分な経験や知識・能力が備わっているとは限らないと想定したためである。その分、個人投票は票数が多くなり、「人気投票」としての意味は強くなる。担任投票は個人投票に比べれば数は少なくなるがかなり強い権限を与えてある（審査方法の項目で解説）。なお、担任投票は票を投じたものの氏名が明らかになるようにしてある。

審査員投票が、本来の意味での「順位付け」に貢献するものである、というのが基本的なスタンスである（なお、教職実践演習内での初期設定では、審査員は二名以上、となっていたが、実際の模擬合唱コンクールにおいては依頼した審査員が都合で審査できず、一名の審査となった）。

3-4 審査方法

①個人投票、②担任投票、③審査員投票の順に記す。

①個人投票は順位を出す、一位から九位までを投票せず、一位、四位、七位を投票する。模擬合唱コンクールでは参加10グループに学年設定をしていないため、普通に順位を出す「一学年10クラス」という通常あり得ない大規模校をシミュレートしたことになる。そこで、個人として一位から九位（自分のチームは除いて）の順位付けを行った後に、一位～三位→3年生、四位～六位→2年生、七位～九位→1年生と判定したことにする。この上で一位チーム、四位チーム、七位チームを投票し、集計。一位は3点、四位は2点、七位は1点として集計し、発表する。

狙いは、「上位三チームの公表」ではない結果発表を“歓びと達成感”を以て受け取ることができるか、を体験すること。同時に、人気投票というもののもつ度し難い面を、こんな結果に意味はあるのか、と疑問を持つことで逆に担任投票や審査員投票の持つ意味を考

えさせるといふ狙いもある。

②担任投票は、生徒間投票（人気投票）に比べれば信頼の置けるもの、として位置づけるために採用した。

各チームの代表者一名を「担任」とする。担任は、自チーム以外の9チームから三チームを優秀賞として選出する。この時、金銀銅のような序列はつけない。選出する担任の中では三チームに順位がついていてもいいが、飽くまで三つの優秀賞を出す、というのがシステム上の制約となる。これを集計し、最も多く優秀賞を獲得したチームから順に一位、二位、三位を決定する。同点の場合は同順位が複数となる。

これとは別に、担任は「特別賞」を一つ出すことができる。その場合担任の名前を冠して発表する。この特別賞のみは自チームも選考対象とできる。特別賞はチームに与えてもよいし、伴奏者、指揮者などの個人に与えてもよい。

担任投票の狙いは、生徒よりは豊富な知識と経験を持つ教員の投票によって優秀賞を選出するための根拠とするところにある。優秀賞を最も多く獲得したチーム（一位チーム）が、最優秀となる。合唱活動に限らず、美的集団活動にいわゆる競技性を付与する場合、スペシャリストが順位づけるのか、参加者自らが相互に順位づけるのかというのが両極になるが、担任投票は「中をとった」妥協策として用いられるケースが多いだろう、という想定からこのシステムを定めた。利点は教員が生徒の上位として認知されているため、不満による混乱を避けやすいこと。欠点は必ずしも音楽活動の評価に高い能力を持っているとは限らないため、恣意的な持ち上げや引き下げがあり得ること。ただし、優秀賞三つに順位を設けないため、純然と優秀賞の獲得数で最優秀が決められることは利点に含めてよいと考える。

担任投票における“新提案”が特別賞である。これは、自らのチームや個人に与えることが可能であり、音楽活動として評価すると上位三チームには入らない、「下位」チームへの褒賞という性格を持たせることが可能になる。特に自チーム（担任するチーム）への労いに援用できることを視野に入れてある。そのため、誰が選出したかが明らかになる必要があると考えて特別賞には担任の名前を付すこととした（坂本先生が選ばば、坂本賞となる）。

③審査員投票は観点別であり、スペシャリストの評価として位置づけられる。観点別にしたのは得点を客観化するためと、コンクール終了後の反省・検討の際使いやすくすることが狙い。本来、審査員は「善し悪し」のみを判定し、講評を行えばそれでよいというシステムもあり得る（その場合は担任投票が順位を確定することになる）が、今回の模擬合唱コンクールでは、個人投票、担任投票、審査員投票とも順位を出すことができるように画策してある。それぞれの出てくる順位の意味が、実際に演奏した者にとって異なることをコンクール参加者に体験させ、その意味を考える契機となることを期待するためである。

る。

観点は声量、発音、速度・強弱、ハーモニー、歌詞解釈の5項目。声量は「発声、息継ぎ、フレーズ、バランス」などの要素を含む。発音は歌詞の聴き取りやすさ、特にパートが別の歌詞を歌うような曲の場合大きな意味を持つ。速度と強弱は楽譜の指示を考慮しているか、その変化のさせ方（技術）、さらには楽譜に書かれていない部分への工夫などを含む。ハーモニーは音程の正確さ並びに音量・速度の変化やバランスなども含めた判定となる。技術的判定であり、優れた音楽聴を有するかどうかが重要になる。歌詞解釈は「楽曲解釈」と言い換えてもよかったが、中学生という想定になると恐らく楽曲解釈は音楽教員の指導援助の賜となるため、あえて「歌詞」というタームを使った。5項目の中では唯一音楽的ではない評価になり、審査員個人による揺らぎが大きくなることが想定できる項目となる。

観点別の評価は実際の合唱コンクールでも多く用いられ、通常は音楽の基本的な要素が項目として立てられる。具体的にはリズム、メロディ、ハーモニーの三つになる。これは純然と音楽的な判断となるため「よい」「悪い」は明確に評価出来る反面、劣っているものを教育的に価値がある、と考えたときに救う術をのこせない。そのため「表現力」や「演奏の工夫」といった項目が入ることが多い。今回の模擬合唱コンクールでは敢えてそうした「総合的視点」を持つ項目を入れなかった。その代わり、例えば声量にバランスやフレーズの要素を加味するなど、審査員個人の匙加減に期待する項目になっている。なお、「発声」という項目も多く見られるが、今回は敢えて「声量」としている。実際には音大生が歌うため、中学生向けの「発声の正しさ」を残す必要もなかろう、と考えたためであり、実際のコンクールには残す妥当性を否定しない。「楽譜の読み取り方」「楽譜への忠実さ」などは「歌詞解釈」の項目に委ねた。詳細は前述の通り。

各項目は六点満点としてある。これに関しても「よい・わるい」の二段階、「よい・普通・わるい」の三段階、「よい・どちらかといえばよい・普通・どちらかといえばわるい・わるい」の五段階などがあるのだが、敢えて偶数にした。これは奇数の段階を設けると真ん中の普通（もしくはどちらかといえばよい、わるい）に集中し、総合点に大きな違いが生じにくいと想定したことに理由がある。ただし、八段階、十段階となると、微妙な差が生じにくい代わりに極端な差が出る恐れもあり、四段階か六段階かで迷った末、今回は多めの六段階という選択をしてある（前提として、「審査員が多く、その評価は割れる」という読みがあったのだが、今回の模擬合唱コンクールは審査員が一人になってしまったため、六段階評点の利点・欠点が曖昧になったのは残念である）。

審査員のつける六段階評定の5項目分の合計で順位を産出する。全項目が最高の六点なら30点になる。最高点を獲得したチームがグランプリとして表彰の対象となる。

なお、ここが最も重要と考えている部分だが、審査員は必ず全チームの演奏に「講評」を

付すこととしている。競技性について考察するのが本論の狙いではあるが、教育活動として行われる以上、順位以上にこの講評が重用かつ不可欠である。だからこそ、審査員が複数でなくてはいけないと想定してある。

なお、今回は思惑が外れて審査員が一人となってしまっているが、想定通り審査員が複数である場合は、「審査委員長」といったまとめ役を作ることは想定していない。全員同格というより、審査員相互の調整は全く考えるべきではないとした。極端な採点や理不尽な採点が交じることを想定し、それが全体として吸収できるような審査員の選定にこそ最も力が注がれるべきであると考えている。

4. 模擬合唱コンクール

実施日 2017年1月12日(木)

実施場所 同朋学園 ホールD

実施時間 9:30より

4-1 審査結果

審査員投票、担任投票、個人投票の純に示す。なお審査員投票の「課」は課題曲、「自」は自由曲をあらわし、続く数字は項目別の得点を示す。）

…審査員投票：審査員の人数は計画当初は三名、実際には一名

(数字は左から声量、発音、速度強弱、ハーモニー、歌詞解釈)

- | | | |
|---------------------------------|-------------------|------------------|
| ①春に
(総計 34 点) | →課：4.3.2.2.3 計 16 | 自：4.3.4.3.4 計 18 |
| ②HEIWA の鐘
(総計 52 点) | →課：5.5.4.5.5 計 24 | 自：5.6.5.6.6 計 28 |
| ③聞こえる
(総計 49 点) | →課：6.5.5.4.4 計 24 | 自：6.4.6.4.5 計 25 |
| ④時を越えて
(総計 49 点) | →課：5.4.5.4.5 計 23 | 自：5.5.4.6.6 計 26 |
| ⑤友 旅立ちの時
(総計 36 点) | →課：4.4.4.3.5 計 20 | 自：3.3.3.2.4 計 16 |
| ⑥花を探す少女
(総計 53 点) | →課：5.5.5.6.6 計 27 | 自：5.5.6.4.6 計 26 |
| ⑦あなたへ 旅立ちに寄せるメッセージ
(総計 52 点) | →課：6.5.4.5.5 計 25 | 自：6.6.4.5.6 計 27 |

- ⑧ひとつの朝 →課：6.4.5.4.5 計24 自：5.4.5.4.6 計24
 (総計48点)
- ⑨野生の馬 →課：5.5.6.5.5 計26 自：5.6.6.6.5 計28
 (総計54点)
- ⑩虹 →課：3.5.5.4.3 計20 自：3.5.5.5.5 計23
 (総計43点)

課題曲順位 ⑥→⑨→⑦

自由曲順位 ②⑨→⑦→④⑥

総合順位 ⑨→⑥→②⑦

…担任投票 (優秀賞を得た票数)

①1票 ②4票 ③4票 ④1票 ⑤1票 ⑥9票 ⑦3票 ⑧1票 ⑨5票 ⑩0票

最優秀 ⑥ 次点⑨ 次次点②③

特別賞 ⑤3票 (うち2票は伴奏者へ)

⑩2票 (1票は伴奏者へ、1票はソリストへ)

⑥1票 (チームリーダーへ)

⑨1票

(担任のうち二名は特別賞を出さず)

…個人投票 (一位、四位、七位をそれぞれ3、2、1として集計した点数、下線は最多)

① 29点 (一位 2票、四位 5票、七位 13票、計20票)

② 36点 (一位 0票、四位 16票、七位 4票、計20票)

③ 42点 (一位 10票、四位 5票、七位 2票、計17票)

④ 35点 (一位 3票、四位 10票、七位 5票、計18票)

⑤ 12点 (一位 2票、四位 0票、七位 5票、計7票)

⑥ 122点 (一位 36票、四位 6票、七位 4票、計44票)

⑦ 30点 (一位 1票、四位 9票、七位 9票、計19票)

⑧ 15点 (一位 0票、四位 3票、七位 10票、計13票)

⑨ 37点 (一位 6票、四位 6票、七位 7票、計19票)

⑩ 4点 (一位 0票、四位 0票、七位 4票、計4票)

(投票者数60名、履修者75名、欠席2名遅刻1名、投票率60/72、83%)

4-2 考察

審査員投票の結果は、課題曲、自由曲とも上位に入ったチームが上位を占めた。予想では課題曲の順位が本来の「演奏力」を示し、自由曲の順位は「曲選び」の正否を示す、と考えていたが、演奏力の高いチームは自分たちの歌唱力に見合った曲を選択し、曲に叶った表現を見つけて演奏した、という結論になる。

細かな分析は全ての投票結果について一通り述べてからとするが、上位三チームが⑥⑦⑨であり、②がそれに絡むというのが審査員投票の意味するものとなる。

担任投票の結果は、上位三チームが②③⑥⑨（②と③は同票）となった。審査員投票では上位と認定された⑦は五位。寧ろ特筆すべきは票数を集められなかった①④⑤⑧（1票）と⑩（0票）である。特に一人も「自分にとっての上位三チーム」に推されなかった⑩は審査員投票では七位で、投票の方法によって生じた大きなズレと言える。ただし、下位五チームと考えれば審査員投票と一致している。

大きなもう一つのズレが③チームで、審査員投票では上位三チームに含まれていないのに対し、担任投票では同数で三位になっている。⑦と⑤の評価が担任投票と審査員投票では逆転したとみることもできる。

ここまでの二つの審査結果を比べる限り、本質的に審査員投票と担任投票では大きな差は出ていないと結論できる。しかしこれは、1、審査員が一名で、評点の「ばらつき」が生じていないこと、2、そもそも担任は音大学生で、音楽的な知識経験に優れているため、担任間の評価感（音楽を聴く耳）に大きな違いが生じないこと、この二点が影響していることは間違いない。実際は、審査員が複数となれば審査員投票の段階で各自の審査員評点がばらつくため、地均しされた数字が「妥当なもの」になるかどうかを（飽くまで擬似的にはあるが）検証することが模擬合唱コンクール事態の大きな目的であった。今回はそれが行えなかった。非常に残念である。また、「担任」という言葉を用いたように、実際の合唱コンクールではクラス担任がこの投票を行うわけであり、当然音楽の教員は含まれない（含まれたとして除外すべきかどうかという問題が別に生じる）。これは飽くまで仮説であるが、審査員投票との乖離は大きくなると予想している。これも今回は数字に表れず、結果として審査員投票と担任投票では「良し」と評価されたチーム、「悪し」評価されたチームともほぼ異同は生じなかった。

ただし、担任投票における“特別賞”は、本研究において想定した「仮説」に近い結果を示した。特別賞は⑤⑩が服す票獲得。⑥⑨が1票獲得している。上位チームに入った票のうち、⑥を推したのは⑥チームの担任、つまり「自薦」であった。他は全て「他薦」。⑨に入った1票を除くと、他の票は全て下位チームに集中している。

ここで審査員投票最下位になった①チームについて言及すると、大変に強力な男声が一人居て、残りは歌が専門ではないメンバーであったためバランスが全くとれていないばかりか、非常に明らかであるはずのそうした問題点を改善するための努力に欠けた（つまり

練習不足だった) ことによる得点の低さが順位に直結している。その状況は担任投票でも“正しく”反映され、下位チームではあっても①には票が入っていない。

一方で、点は伸びず総合点で九位だった⑤は、本番に伴走の学生が交通事情により遅刻して間に合わず、急遽ピアノ専攻の学生が初見で伴奏を行って本番をこなす、というハプニングに見舞われている。⑤チームの特別賞3票のうち2票が伴奏者に投じられているのはこうした「敢闘精神」に向けてと考えられる。

特別賞で2票を集めた⑩はソロのある曲を自由曲に選択しており、ソリストに投じられた票はその努力(声楽専攻ではない学生が担当した)に向けてと考えられる。伴奏者に投じられたのは、純然と伴奏が音楽的に素晴らしかったからであろう。ここについては審査員講評を参考にされたい。

こうした個々の事例分析から言えるのは、「個人の権限において特別に表彰する権利」は、通常では顕彰されない“エアポケット”に光を当て、なるべく多くの参加者にやりがいと味わわせるという効果を狙って行使されやすい、ということになる。これが「担任」という職責に絡ませた投票にしたことの狙いでもある。音楽的な価値のみで推し量る場合、専門性が高いものの評価評定にはそれほど大きなばらつきは生じない。巧みなものは高く評価され、拙いものは低く評価される。それでは、拙いものの得られるものがなくなる。それを劇的に解消しうる、一つの提案として、《個人が与える賞》を多様に用いることの意義が証明されたと考える。

最後に個人投票である。一位を三点、四位を二点、七位を一点に換算した合計では⑥チームが122点で最高点。以降③(42点)→⑨(37点)→②(36点)→④(35点)→⑦(30点)となり、上位チームの構成は担任投票と一致。審査員投票とは③と⑦が異なっている。

ただし、この「換算合計点」でどのチームが優れていたか(人気があったか)を判断するのは実は根拠に欠ける。なぜなら、一位、二位、三位を選んだわけではないからである。四位に選ばれると言うことは、上位三チームには入らない、でも下位三チームにも入らない、つまりはBクラス、と言うことになる(正しくはBクラスのトップ)。七位に選ばれると言うことは、下位三チームに入ると言うことである(正しくはCクラスのトップ)。名前を挙げられないチームの方が高く評価されているはずである。しかし、この合計点で審査員投票、担任投票と余り変わらない結果が出たのは想定外だった。

本来なら、一位の獲得票数の多いものはAクラス認定、四位ならBクラス、七位ならCクラスに入ると多数から評価されたという点で捉えるべきであろう。この方法論で集計結果を見直すと、一位は⑥→③→⑨であり、四位は②→④→⑦、七位は①→⑧→⑦となる。これも担任投票にほぼ重なり、審査員投票との違いは③と⑦になる。ここままで結論できるのは(今回の審査に限り)審査員投票は演奏を行ったもの、若しくは演奏を作り上げるに当たって共同参画したものによる《自己評価》と完全には融和していないということだ。

前述の通り、審査員が一人であったが故の問題だと考えたいのだが、確かめるには同様の採点実験を今度こそ複数審査員で行う必要がある。本論においては検証できなかった、と言わざるを得ない。

さて、今回の審査においては個人投票も大いに信頼性があるということが結論できるが、一つ注目すべき部分を指摘したい。Aクラス（一位）、Bクラス（四位）、Cクラス（七位）には“該当せず”とされたチームについてだ。具体的には②、⑤、⑧、そして⑩になる。②以外は全ての投票において「下位グループ」に分類されているのだが、まず⑤の場合Bグループ判定が0票である野に対し、Cグループ投票は五票。一方Aグループ投票が2票ある。「とてもよい」もしくは「よろしくない」と両極端に評価するものがいたのに、「良くも悪くもない」と判断したものはいなかった、という特徴有るグループであると言える。これぞ、“人気投票”の典型と考えたい。単に好きか嫌いか、で投票すれば、こういうグループがもっと増えると予想していた。結果的にはこの⑤以外には「評価が真っ二つに割れるグループ」はあらわれなかったが、これこそ音楽大学の学生が生徒を演じたからであり、本来はこういうグループが複数出てくる可能性の方が高いと考える。

次に②と⑧のグループ、これはAグループへの投票が共に0票で、「とても良い」とないえない、という評価は確定したと言って良いだろう（特に②に関しては審査員投票のみが違う評価をしている）。そうした前提の中で②は概ねBグループ、⑧は概ねCグループである、と判定されている。これは評価が収束し、高い確度で定まったケースだと考えたい。

最後に⑩グループであるが、これはAグループ、Bグループへの票が共に0票であるのに対し、Cグループへの票も4票と少ない。敢えて解釈するなら、下位グループには属すが、七位ではない（八位若しくは九位である）という判定と言えよう。これも低い評価が高い確度で定まったケースだと考えられる。

とはいえ、今回の個人投票は飽くまで「一位、四位、七位」を投票してもらったため、獲得票が0だったからと言ってAグループではない、とは本来は言えない。上位三チームには入るが二位、若しくは三位である、という判断の可能性もあるためである。従って飽くまで審査員投票、担任投票と比べて、の評価になるが、今回の審査実験においては個人投票も高い確度で演奏の音楽的価値を（相対的に）判断出来た、と考える。

総評としては、観点別に項目を設けた審査員による判定より、項目を設けず主観に沿って票を投じた担任投票・個人投票の方が高い信頼性を示したように思える。今回は審査員が一名であったため、“確定的な結論”を挙げるには無理があるのだが、観点に基づいて点をつけると、本来の音楽的聴取では聞き逃される些細なポイントにまで採点が及ぶため、総体としての音楽演奏の価値を正しく評価出来ていない可能性が指摘できる。

5. まとめ

特別活動は生徒の自主的・実践的な取り組みを前提としている。一方、学校行事として行われる合唱コンクールは、その競技性や公開性という特徴故、必ずしも生徒が自主的に取り組むことだけで形作られる活動ではない。ただし、「学校行事である」という観点で見ると、教師主導型で、枠組みが事前に決まっている取り組みになることは必ずしも目的を逸脱しているとは言えない。

合唱活動は中学校「音楽科」のみならず、中学校生活の中でも大きなウェイトを占める、ある意味中学校三年間を象徴するものである。これは良きにつけ悪きにつけ、今も昔も変わらない。それにもかかわらず、音楽科の時間数が減っていることは、特に合唱活動の質を保ち、より高くして行く目的には逆行している。今まで何年もやってきた、伝統的な取り組みだから、質的改善に関しては音楽科に丸投げしてともかくスケジュールだけ立てるが如き「伝統」としての行事になってしまうのでは、中学校生活の意義を貶めることになりかねない。

ここで強く提唱したいのは、合唱コンクールは音楽科領域の活動であるというより、むしろ特別活動のものであるという認識の再設定である。音楽科は飽くまで協力する形での貢献にとどめ、学級活動の中で作り上げることを目指したい。

そこで最初に目指すべきことが、「如何なる審査によって優劣を判断するか」の基準作りであり、その審査に携わる者への意識改革の働きかけだと考える。理想的には学校に属する全員が審査を行うことが望ましい。

曲目を選び、練習計画を立て、良かれと思う演奏に向かって変革を試みる。基本は学級で全てを行い、音楽科教員は授業においては生徒に、そして同時に担任の教員に進むべき道とその歩み方を教授するというのが望ましい。

合唱コンクールは、学校に必要とされる活動であると信ずる。そして、その命脈を握っているのは学級での取り組みであり、特別活動なのではあるまいか。

本研究では採点システムに中心を当てたが、同じ「特別活動と合唱コンクール」のテーマを別の視点から考察する必要も同時に感じた。次回の目標は“音楽科教員が直接指導しないための、学級担任教員への教授法指南について”となる。完全なマニュアル化は考えていないが、中学校におけるクラス合唱指導への一助となることを、引き続き第一義として考えていきたい。

講評

①…楽譜に表紙を作成したところは「見せる」という意識の表れ。

課：冒頭を男声のソロで。声量、声の響きに優れるメンバーを生かす戦略。

ハーモニーが生まれる部分で声量を落とした。冒頭のソロが声量がありすぎるため、意図的にやったのであれば練習の意識の高さの表れ。ただし「自然に」落ちたように思えた。

個人の力量に優れるメンバーが明らかであるため、声の融和に問題あり。

伴奏と合唱との協働が感じられない。

音量のバランス並びに声質が不揃いであることが表に出すぎ。お互いの声をよく効いて自分の声を調節する工夫を。

自：アインザッツが合わない。練習の時に課題として認識できていない。

お互いの声を聴こうという意識が希薄。

ピアノ伴奏、課題曲より自由曲の方がよく合唱を聴けている。

「心のダムに」の部分、全声部のリズムが揃っててホモフォニックの響きを聞かせているが、ハーモニーが貧しい。

歌詞の揃いもよくない。

結論として、音取りが甘い（音程が取れていない）。

②…

課：声の合わせ方（声質）が素晴らしい。練習の賜。

フレーズの終わりがきちんと揃っていて美しい。

よく聴き合えている。ピアノとの呼吸が合っている。

その結果、ユニゾンがとても美しい。

「ゆめ」の「ゆ」、発音を気にかけていることがよく伝わってくる。

途中でピアノ伴奏が崩れたが、持ち直した。

ソプラノのヴォカリーズに力が足りない。

自：冒頭のコーラル、力強い。

課題曲同様、ユニゾンが格段に美しい。

課題曲に比べるとピアノが弱い。合唱の作り出すハーモニーと溶け合っていない。

コーラル部分の歌詞が非常によく聞こえる。

③…

課：混声版ではなく、女声合唱版を選択。その長所を活かしたいところだが、成員の歌唱力にギャップがある。上手なメンバーが劣るメンバーに“合わせる”必要があるのでは。

声量はあるが、ハーモニーに難がある。特にバランス。低音の厚みのある声と、ソプラノの澄んだ声とのバランスが特に気になる。

ピアノがもたつく。譜めくり役を定めた方がよかったのでは。

自：冒頭のユニゾンに合わせて欲しい。音程ではなく歌詞がぼやけている。言葉のハーモニーを意識できていない。

ハミングは素晴らしい。天国的な美しさがある。恐らく、バランスが揃うからだと思う。

ポリフォニックに曲が展開する部分、言葉が混じる。聞き取りにくくなる。…ということを念頭に置いた曲作りをしないと、楽譜を見て聞くもの（若しくは暗譜しているもの）以外には歌詞が届かない。発音に気をつけて。

「時代が語りかけてくる」からはハーモニーがメインとなるが、アインザッツが甘い。ハーモニーが鳴り出すタイミングがぼやけている。発音が融和しないという難点がここでも解決されていない。

ただし、ハミングは本当にキレイ。

④…

課：発音が甘い。

伸びる音の母音が揃っていない。特にAとOが。

人数が七人であるため、声量的には不利…だが、七人と考えれば声量はあるとも言える。

「歌詞を伝えよう」という意思が見える。これはすばらしい。メッセージ性の高い演奏。

ピアノが合唱を支え切れていない。

対位法的な処理になると、個人の声の完成度がでこぼこしていることがかなり目立ってくる。お互いの声をよく聞くこと。

自：ユニゾンが美しい。

課題曲にも増してメッセージ性の高い曲だが、歌詞を伝えようと意識もより強くなっている。歌詞の内容によって発声法を変えている？

男子パートの声が弱い…これは残念。演奏の完成度は高いだけに、本来なら男子の声でパワフルに聞こえてくるはずの部分が痩せてしまうのは物足りない。

強弱の減り張りはもうひと頑張りしてもらいたいところ…全体の音量がそれほど大きくないことも影響しているか。

⑤…

課：音量よりもバランスを整えることに注力していることがよくわかる。

メンバーに声楽専攻は一人もないけれど、素晴らしい完成度。

ユニゾンの声の揃い方が素晴らしい。称賛に値する。

ハーモニーが出てくる部分、パート相互のバランスが本当に美しい。それだけではなく、言葉がとても良

く聞こえる。

男性パート担当（女性）がとても安定しているので、ハーモニーに芯があり、ぶれない。

ただし、ハミングの響きが浅い。

課：非常に難度の高い曲。

冒頭のソロ、豊かな声量が必要…若干物足りない。

「ひにかがやいた」のハーモニー、ここは非常に精緻な作り込みが欲しい。難しいのは判るが、ものたりない。惜しい。

“いっしゅん” “とびちる”、言葉によるコラージュなので「合わせなければ」台無し。ここは減点せざるを得ない。

よくぞこの人数でこの曲を歌った、と言うところを評価。チャレンジ精神は称賛されるべき。

⑥…

課：ピアノが大いに問題。これでは困る→ピアノが落ちて、なくなっても歌うこと！

男性パート担当は一人だが…実音！これはスゴイ。ここまで低い音をこれだけ響かせられるのは特殊な才能と言える。専攻は歌とはなんの関係もないのに…。

このチームにも声楽専攻はいないが、声量は非常に豊か。驚愕。

ピアノがもう少し何とかなれば…大変に残念。

自：序奏、堅い。柔らかさが欲しい。

「あいとなみだ」からは非常にパンチが効いている。素晴らしい。

ビートを感じ、表現することに長けたチーム。

曲の特徴を正しく理解し、魅力を余すことなく伝えている。非常に練習しており、全員の演奏意図が見事に揃っている。ブラーヴィ。

⑦…

課：ピアノが素晴らしい…逆に素晴らしすぎる。歌とのバランスが崩れる。

声量はある。ただし、ユニゾンでの声の融和への意識が弱い。

ハーモニーが生ずる部分から、“お互いの声を聞く”ことに意識が行っていることが判る。

アンサンブルの精神は生きている。

男性パートに多くの人数を割いた戦略が奏功。綺麗なハーモニー。

ハミングになると、個人の力量差が見えてしまうが、ここにきてピアノのサポート力が生きる。ハミングには歌詞がないが、ピアノが歌を奏でられる。

自：ピアニストも伴奏しながら歌う…これは空前絶後。この曲を伴奏しながら歌うというのは大道芸レベル。

グループ成員にタレントが揃っているチームではないが、ソプラノが強いことを上手に生かしている。戦略が巧み。

ピアニストが歌うという離れ業まで用いているが、それでも男声が弱い。あと一人男声がいれば、素晴らしい合唱になったと予想。

並ぶ位置に工夫が欲しかった。男声がピアノ（伴奏者）の側に位置すれば、もう少し声の強さが増したのではないか。

⑧…

課：七人グループと言うこともあり、声量は無い。

男声がとても美しい。ピアノの音がもう少しおさえられているとよかった。

強弱の減り張りと、ハーモニーの減り張りが非常に良く考えられていて、部分部分での“主役”が無理なく感じ取れる。

声量の最大値は変わらないので、どこでどの程度落とすのか、という練習が非常にしっかり行われている。ユニゾンを戦略的に用いている。

惰性で謳っている部分が殆ど無い。全ての部分に明確な演奏意図がある。

自：言葉の力（歌詞を読み込んで、メッセージを載せる）への意識が素晴らしい、凄まじい。

このチームに関しては、完全に「選曲の勝利」。この曲の良さを限界まで理解し尽くした上で歌っている。

「あるときうまは」からの無理矢理感満載のハーモニーを見事に作り上げた。流石。ここは素直に称賛。ただし、ハーモニーに意識が行きすぎて、この部分はメッセージ性が薄くなった。

⑨…

課：伴奏者が渋滞に巻き込まれ間に合わず、メンバーのピアノ専攻学生が急遽代役。

そもそも男性が多かったチームであったため、伴奏で一人抜けても男声パートの薄さにはつながらず。ケガの功名。

しかし、音がとれていない（これじゃ意味がない）。

ハーモニーはほぼ全滅。なんと言ってもユニゾンが全く一本になっていない。

音程が不安定であることよりも、言葉（歌詞）が揃わない。練習不足だな。

個人の音楽的能力はそれなりに高いのだが、そうした資質や能力を融合させるための時間をまるでかけていないので、ほぼ即興セッションに近い。

そんな中で、伴奏は完全に初見だったはずだが、見事に即興で乗りきった。素晴らしい。

自：女声が薄すぎ。男声は二人しかいないのだが、こちらの方が音が厚い（音程は悪いけれど）。

声が出ていないだけでなく、女性は音もとれていない。

ピアノが初見になってしまった部分を別にして採点しても、「全員が集まって歌って練習した」とおぼしき部分が殆ど無い。有り体に言って、練習不足です。

⑩…

課：ピアノが上手い。

合唱の音が“小さい！”声量がない。

更に、声域が狭い。発声法に難があり、高音部譜表第四線のDになるともう出ない。

ユニゾンの言葉は非常にキレイにあわせてある。ただし音程がぶれる。音がとれていないのではなく、声を支えられていないという技術的な問題。

強力なメンバーが一人、二人いれば少しは変わるのかも知れないが、歌唱力で全員を引っ張る存在がチーム内にいない。

言葉は揃っているのに…メッセージ性が低い。歌詞を理解して歌っているのだろうか？

自：パート相互ではなく、一つのパートの中での声を合わせる努力を。

お互いに聴き合う、という段階が踏まえられていないと感じる。

メンバー同士で出来ることを一生懸命にやっている、という点は評価。つまり、練習はよくやっている。

聞くものに伝わりにくいのは、まずディナミックの幅が狭いから。この問題点をお互いに聴き合うことで気づき、“どうすればそれを克服できるか”を考えるとところまでは行き着いていない。→ピアノが優れているのだから、これを利用することが出来たはず。

ピアノは上手だが…この曲を上手いピアノが伴奏した時にあらわれる「悪い部分」がほぼ全て出ている。ようするに歌がピアノを食ってしまい、歌から曲の命が聞こえてこなくなる。